

李徴はなぜ虎になったか : 中島敦『山月記』を読む

榎浪, 俊博

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

70

(開始ページ / Start Page)

12

(終了ページ / End Page)

24

(発行年 / Year)

2004-07

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009934>

李徴はなぜ虎になったか

——中島敦『山月記』を読む——

榎浪俊博

作者は、李徴についての説明を次のような叙述から始めている。「隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった」と。「博学才穎」とは若き李徴の無限の可能性と不可能性を暗示するものである。ここには個人と社会の原理的な問題が含意されており、それらを包摂する可能性として李徴の若年性が、そしてその関係を突き抜けて不可能性の領域へ進出する蓋然性として李徴の将来が暗示されているのである。言わば「社会と個人」から「個人と社会」への転移である。個体の内部に占める割合の、「社会」の能うかぎりの濃密から希薄化へ。また、「個人」の占める割合の、社会との微妙な均衡から能うかぎりの社会性の希薄化へ、ということである。

「隴西」「虎榜」「江南尉」は李徴の若年性と結びついた社会性を象徴する名辞であり、李徴が後年口にする「しあわせ」――

――中途半端に人間であるよりはいつそ虎になったほうがしあわせだという――とは別のしあわせが、ここに理想的な形で出ているのであるが、それは後年の李徴がいくら齒がみをして欲しがっても二度と手にするのできないものである。それは李徴の若年性ととともに、「社会と個人」とともに、「博学才穎」とともにある。

「天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられた」ことと、「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずることを潔しとしなかった」ことを逆接の助詞「が」で殊更繋げて叙述しなければならなかった理由はそこにある。李徴の「博学才穎」と狷介、自恃に満ちた「性」は内面の胸奥深くで切り結んでおり、一方無くして他方はありえないと考えてよからう。一人格を形成するものとして相補的なそれらは、李徴の若年性として「賤吏」「俗悪な大官」と鋭く対峙するのである。

続いて作者は書いている。「いくばくもなく官を退いたのちは、故山、號略に起臥し、人と交を断つて、ひたすら詩作に耽った。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである」と。「人と交を断」つのは、李徴の中の「社会性」の放棄を意味するのではなく、——李徴は最後まで「社会性」を放棄しない。作品の終わり近くで披瀝する漢詩でも哀慘の社会的地位に触れているし、作品も完全に虎になる場面は描かれない——個体の個人性への沈潜、また自らの個性（社会性を備えた）へのこだわりと錬成への意志に他ならない。そのことと「社会」との微妙な接点が「詩家としての名を死後百年に遺そうとした」という、その「詩家としての名」であり「死後百年」なのである。「死後百年」の超時間性は、「個人」と「社会」の関係の究極的な理想態として思い描かれて、ある。

従つて逆に現在の現実には、それを裏返したほどにみじめなものでなければならぬ、ということであろう。作者は続ける。数年の後、貧窮に堪えず、一度は「妻子の衣食のために」に節を屈したと、「己の詩業に半ば絶望した」こと、「彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬ」ことがいかに「往年の偶才李徴の自尊心」を傷つけたか、を続けて述べる。確かに、「詩家としての名を死後百年に遺そうと」する者の自尊心にとって、「節を屈し」て鈍物たちの「下命を拝さねばならぬ」ことは堪え難いことであり、「彼は快々として樂します、狂悖の性はいよいよ抑えがたくな」り、「ついに発狂した」としても不思議はないと言わねばならない。

だが、これらの作者の言葉は、よく李徴という人物の性格・行動・運命を語っているであろうか。

だが、それと同時にもう一つ検討すべきことがある。『山月記』という作品は大半が李徴の告白で占められているのであるが、告白によつてどれ程自己を語ることができるのか、ということである。もちろん、すでに李徴は虎になっており（正確には半人半虎であるが）、今更意図的に何かを隠さねばならぬ理由はない。社会に対して、とりわけ親友の哀慘に対して隠さねばならぬことはなく、むしろ長所も短所も全てを理解して欲しいと李徴は願っている。そうではなくて、自己を語る、ということとは、とりもなおさず自己を解釈することであり、その自己を語ることである。告白することである。だが、李徴の場合、虎になったという結末から遡行的に——つまり、「醜惡な今の外形」を前提にして告白するのである。この時、何が可能で何が不可能であろうか。あるいはその可能と不可能を峻別することができであろうか。今、はつきり言えることは、告白することは解釈することであり、自己を再構成することであり、つまり自分という人物を創造することに他ならないということだろう。そうして語り終えた時、自己の個体化が完了する。

「醜惡な今の外形」はこのような告白に際して、どのような陰翳を与えるであろうか。というよりも陰翳のない告白があるかどうか。とすれば、このような告白そのものが李徴という人物による自己の創造の一方法であり、この作品の場合、李徴、哀慘、作者という三者の立場からの視点の解析が、李徴の理解にとつて必要となるだろう。

しかし、創造するとは言っても、無際限に自由であるはずはない。それが「告白」であるかぎりには過去・現在の自己に関してあくまで「事実」を述べなければならぬ。「述べる」について、作者中島敦は『李陵』の中で司馬遷の口を借りて次のように言う。

これでいいのか？ と司馬遷は疑う。こんな熱に浮かされた書きっぷりでいいものだろうか？ 彼は「作ル」ことを極度に警戒した。自分の仕事は「述ベル」ことに尽きる。事実、彼は述べただけであった。しかし、なんと生気澁刺たる延べ方であったか？ 異常な想像的視覚を有った者でなければとうてい不能な記述であった。

もちろん、『山月記』は史書でなく、李徴は（そして作者中島敦は）司馬遷ではない。しかし、『述ベル』とは、違った人間は違った人間として述べることであり、その方法によつてのみ「そこにかかれた史上の人物が・・・みんなようやく安心してそれぞれの場所に落ちつく」のであるとすれば、小説（創作）といえども、一旦そこに一個の人間が存在した限りにおいて、自分が他のどの人間とも違う人間であることを生気澁刺と述べる時、これを「述ベテ作ラズ」の態度と言えないわけはないだろう。たとえ「熱に浮かされたような」延べっぷりであったとしても。これは、小説の内部の論理として言えることだろう。歴史的現実（事件）と人間、と小説的現実（事件）と人間、との関係は、強いて言えば、歴史が小説（的）であり得、小説

が現実（的）であり得ることによつて、相違点を限りなく小さく見積もることも許されよう。あとは文体の問題である。断つておくが、私はここで現実と人間、小説と人間のことを言っているのであつて、いきなり現実と小説を比較しているのではない。念のため。

司馬遷の『史記』が、歴史上の人物の「生気澁刺」たる叙述によつて人に感動を与えるとすれば、中島敦の『山月記』がある小説的現実と衝突する「生気澁刺」たる人間の創造によつて（前者とはほとんど同質の）感動を与えたとしても何の不思議もないだろう。ただし、先程言つたように、李徴には「醜惡な今の外形」つまり「詩人になりそなつて虎になつた哀れな男」という負い目の意識があるので、そこに留意することを忘れてはならない。そして李徴の告白は告白としてこれを聞き、作者の叙述は叙述としてこれを読み、袁修の見方は見方としてこれを評価し、その中で李徴という人物の真の姿に迫るようにしなければならぬ。その意味では李徴は作者中島敦が「述べた」人物と考えるより、独立した人物として李徴が李徴を語り、その個性化を図ろうとしているというように、この作品は捉えた方がよいと思う。李徴は自分自らを「生気澁刺」と述べることによつて確実にその場所を得ている。そう考えた方がよい。

さて、李徴は告白する。なぜ自分が虎になつたかを語る。告白の相手はかつて「最も親しい友であつた」袁修という人物であり、彼は気のおけない人物として登場するので、李徴の告白はそれによつて歪められることはないと考えてよい。李徴は、どうして今の身になつたかを訊ねる袁修に答えて言う。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まった一夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かがわが名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚え、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行くうちに、いつしか途は山林に入り、しかも、知らぬまに自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行つた。気がつくとき、手先や肘のあたりにも毛を生じているらしい。……しかし、なぜこんなことになったのだろう。分らぬ。まったく何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。

これが作者の言う「発狂」の場面であり、虎になった理由に触れた第一番目のものである。一言で言えば運命ということになろう。しかもそれは「分らぬ」ものとしてある。だが、今、理由についての結論を留保して言うなら、ここに現れた李徴の運命観のようなものを他の作品から類推することはできる。

小学校の四年のときだったろうか。肺病やみのように痩せた・髪の高い・受持の教師が、或日何かの拍子で、地球の運命というものに就いて話したことがあった。如何にして地球が冷却し、人類が絶滅するか、我々の存在が如何に無

意味であるかを、其の教師は、意地の悪い執拗さを以て繰返し繰返し、幼い三造達に説いたのだ。……地球が冷却するのや、人類が減びるのは、まだしも我慢が出来た。所が、そのあとでは太陽までも消えて了うという。太陽も冷えて、消えて、真暗な空間をたぐるぐと誰にも見られずに黒い冷たい星共が廻っているだけになってしまふ。それを考えると彼は堪えなかつた。『狼疾記』

自分は、今の人間とは違つた・更に高い存在——それは他の遊星の上に棲むものであらうと、或いは我々の眼に見えない存在であらうと、又は、時代を異にした・人類の絶滅したあとの地球上に出て来るものであらうと、——に生れて来ることも可能だったのでないか？ 其の正体が解らない故に我々が恐怖の感情を以て偶然と呼んでいるものが、ほんの一寸その動きを変えさせましたなら、そのような事が自分に起らなかつたと誰が言えよう。……斯う考えるのは彼にとつて堪え難く恐ろしいことであつた。(同)

地球の、宇宙の運命と人間の運命の不確かさ、人間存在の不確かさが直接的に繋がり、「一生の時の短かさの感じ」は「二十年代でも二百年でも同じ短かさについている」とし、地球の絶滅がたと「何万年後」のことであっても「人間や宇宙に対する信頼の問題」として深刻であることに変わりないと考えるところに、これらの文章の特徴がある。李徴の言う「戸外で誰かがわが名を呼んでいる」という箇所は、この世界の不確かさと、

人間存在の不確かさ、そして我々の「チツボケな存在」「小さい者の恐怖」が反響していよう。実際、このような存在で我々があるのなら、「戸外」から誰に呼ばれても不思議はないのであり、「分らぬ」という眩きが「小さい者の恐怖」の中から絞り出されたものであるからには、この者が或る日突然「発狂した」としてもまた異とするに及ばぬと言わねばならない。

ただし、これはあくまで援用による類推である。作者の頭の中には、あるいはこういう考えがあつたかも知れぬが、李徴にこれを強制することはできぬ。なぜなら、と言おうか、『狼疾記』の三造は発狂もせず虎にもならず、何はともあれ「先刻の自己苛責のことも忘れて人通りの無い街を浮かれ歩いた」で、作品は終わるのだから（ただ、文中に突然あらわれた「我々」の語から、李徴の告白にこのような普遍的な人間存在の在り様を想起することはかなり許される）。李徴にとつて今はつきりしていることは、虎になってしまったこと、のみであり、それと因果関係があるらしく思われることとして、戸外で誰かがわが名を呼んだことが思い合わされること以外に何もない。その「誰か」の正体は分からない。虎になるという運命に立ち至つた李徴は、「分らぬ」ままで済まされぬ。李徴の自己分析はいよいよ本格化する。その方法は、「考えようによれば、思い当たることが全然ないでもない」というものだ。そして李徴は思い当たることとして「自尊心」を挙げる。この「自尊心」はいわば偉大な「自尊心」ではなかったのだ——なぜなら、彼は「詩人になりそなつて虎になつた哀れな男」だったから——「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」というふうには矮小化され

る（このような矮小なものだったら、李徴は虎にならずに犬や猫になっていたらうという意見もある）。これあるために李徴は、「詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師についたり、求めて詩友と交わつて切磋琢磨に努めたりしなかつた」し、「俗物の間に伍することも潔しとしなかつた」と言う。「事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己のすべてだったのだ」というわけである。

己はしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙悲とによつてますます己の内なる臆病な自尊心を飼ふ、とらせる結果になつた。人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまつたのだ。

この部分は主観的な立証としてかなり説得的である。「生気澁刺」としている。つまり、「詩人になりそなつて虎になつた哀れな男」による説明として説得的である。しかし、不幸な結末から原因を探る内省的な視点をいったん取り払つてこれを見れば、これは充分に疑わしいと言わねばならない。作者は作品冒頭で李徴の才能、自尊心、狂悖の性を挙げていた。そして「人と交を絶つて、ひたすら詩作にふけつた」と説明していた。とすれば、むしろ作者の理解の方が正しいのであろうか。豊か

李徴はなぜ虎になったか

な才能、自尊心、努力家、そして狂悖の性。しかし、もしもそうなら、李徴の挫折の原因は「文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる」というその点に求めなくてはならなくなる。もしくは狂悖の性に。だが、「文名」「生活」また「狂悖の性」によって（つまり精神の錯乱の傾向によって）、挫折し発狂したでは話にならないだろう。もともと、李徴の言うような「妻子を苦しめ」たという告白よりも、「妻子の衣食のために遂に節を屈した」という事実を信じなくてはならないから、作者の言い分の方が正しい場合があることは言っておかなくてはならない。

李徴の説明によれば、つまるところ、「臆病な自尊心」に起因する怠惰によって才能を伸ばしきれずに詩人になりそこない、「尊大な羞恥心」という性情によって虎になったことになっている。しかし、我々は李徴の「自嘲癖」に惑わされてはならない。李徴が詩人になりそこなつて虎になった、という命題は、李徴の論理では、結局、詩人になりそこなつたゆえに虎になった、の意になるほかないのだが、これは疑わしい。もちろん、「内心」が虎だったから虎になった、も疑わしい。したがって、いまだ「虎になった」理由は不明のままである。李徴がはたして「詩人」であるのかどうかについては後で述べることにしよう。李徴は最後にもう一つ理由を挙げてみせる。「飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身をお墮すのだ」と。しかし、これこそ因果関係を逆行する考え方の典型であり、「虎になった」という動かし難い事実の前では何でも反省材料になるとい

う好例であろう。李徴が妻子のために節を屈したというのはずで先に述べたが、それだけでなく、詩人は必ずしも倫理的でなければならぬことはないものであつて、深く人間を見据える眼と心を失いさえしなければ、佳品（第一流の作品）をものしうるのである。作者は李徴のこの言葉が「自嘲的な調子」で語られたと評している。この評言は首肯してよい。詩人でありうるものが人でありえないはずはない。それどころか、虎になつても尚妻子のことを気にかけている男が、はたして愛情に欠けるかどうか、甚だ疑わしいのである。芸術（文学）は善美を兼ね備えてもよいが、そうでなければならぬと言えないのは常識に属するであろう（文学のためには妻子を犠牲にしなければならぬ）と言つた中島敦の同時代作家も佳品を遺した。

李徴は、（その豊かな才能と自尊心を別にすれば）人々の無理解と生活力の無さと後悔の念の強さによって、李徴たりえているといえる。このうち最後のものは、（自嘲癖とは別に）李徴が虎になった理由との関連として重要であると思える。

後悔の念の強さは、志の強さに比例する。李徴は「詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのであり」とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えたいでは、死んでも死に切れない」と言う。この執着は『名人伝』の紀昌のひたむきさに通じるものである。

紀昌は、天下第一の弓の名人になろうと志を立てる。次々と師を求め師を越える紀昌には、いかなる困難も次の飛躍への階梯にすぎない。およそ十有五年の修行を経て、彼はある者に答

えて言う。「至為は為すなく、至言は言を去り、至射は射ることなし」と。ここには「世界」に直接向かい合う紀昌の内面の論理が余すところなく示されている。全てを知らなければ何も知らないに等しい。全てを知ることによって初めて「世界」は意味を持ち得、自己の存在も有意味であり得るという論理である。だが、これは、「世界」が完全であるときにのみ成り立つものではなからうか。宇宙が永遠に存在し、地球は冷却せず、人類が滅亡しないことが約束されているならば、この内面の論理はそれに相応しい対応物を持つことになる。だが、「世界」の不完全を前提とする現実の論理は、あくまでも「射之射」であるほかはない。なぜなら、それは、動くものを動く矢で射るところに生じる確執を基盤とするものだからである。とすれば、「不射之射」を精髓とする内面の論理は、所詮「願望」に他ならぬ。このとき、逆に、この「世界」は我々のごとき「チツボケな存在」には到底理解不能なものでなければならぬとする要求が生まれる。全てを知ることができないとき、逆に、何も知ることができないほどの圧倒的な偉大さを相手に要求するのである。これらはともに、絶対（完全）の相のもとに「信賴」を得たいとの願望に由来するが、しかし、いわばこの「世界」の実相に照らして、「世界」が完全でなく、しかも理解不能であるとき、人間存在の危うい位相が浮かび上がる。李徴は、このような人間存在を象徴する。

李徴は紀昌のまつたき陰画である。のみならず、『山月記』と『名人伝』との関係もほぼこれに同じいと言つてよい。

李徴は、紀昌が天下第一の弓の名人になろうと志を立てたよ

うに、詩家としての名を死後百年に遺そうとする。紀昌はそれを果たして内面の論理を開示するが、しかしこれが不可能であったとき、すなわち「世界」が不可知であることを知ったとき、人間存在はいかなる像を結ぶか。これが『山月記』の主題である。

李徴は山中の闇の叢の中にいる。ここは普通の人々の入る所ではない。この道は「旅人は白昼でなければ通れない」のである。白昼とは、「世界」とは、「存在」とは、といった疑問を持たぬものの住むところだ。李徴は山中の闇の叢中に住む。李徴の苦悩は、『悟浄出世』の悟浄の「病氣」と根本において同じものである。

・・・こうした疑問を渠が洩らすと、妖怪どもは、「また、始まった」といつて嗤うのである。あるものは嘲弄するよう、あるものは憐愍の面持ちをもって「病氣なんだよ。悪い病氣のせいなんだよ」と言つた。

事実、渠は病氣だった。

いつのころから、また、何が因でこんな病氣になったか、悟浄はそのどちらをも知らぬ。

医者でもあり、占星師でもあり、祈祷者でもある、一人の老いたる魚怪が、あるとき悟浄を見てこう言つた。「やれ、いたわしや。因果な病にかかったものじゃ。この病にかかったが最後、百人のうち九十九人までは惨めな一生を送らねばなりませんぞ。・・・この病に侵された者はな、すべ

ての物事を素直に受取ることができぬ。何を見ても、何に出会っても、『なぜ?』とすぐに考える。究極の、正真正銘の、神様だけがご存じの『なぜ?』を考えようとするのじゃ。そんなことを思うては生き物は生きていけぬものじゃ。そんなことは考えぬというのが、この世の生き物の間の約束ではないか。ことに始末に困るのは、この病人が『自分』というものに疑いをもつことじゃ。なぜ俺は俺を俺と思うのか? 他の者を俺と思うてもさしつかえなからうに。俺とはいったいなんだ? こう考えはじめるのが、この病気のいちばん悪い徴候じゃ。どうじゃ。当たりましたろうがの。お気の毒じゃが、この病には、薬もなければ、医者もない。自分で治すよりほかはないのじゃ。よほどの機縁に恵まれぬかぎり、まず、あんたの顔色のはれる時はありますまいて。

悟浄は「あらゆる賢人、あらゆる医者、あらゆる占星師に親しく会って、自分の納得のいくまで、教えを乞おう」と出発するが、長い遍歴の末、結局、「どうもへんだな。どうも腑に落ちない。分からないことを強いて尋ねようとしなくなる」ことが、結局、分かったということなのか? どうも曖昧だな! あまりみごとな脱皮ではないな」と呟かざるを得ない。悟浄にとって、これはついに何事も明らかにしえない難問なのであった。では、李徴は、どのような方法で答えを得ようとするのか。

まず、『名人伝』のような内面の論理の追究を放棄して、外

界（現実）に李徴は参入しようとする。「俗悪な大官」や「鈍物」として歯牙にもかけなかった連中」との対峙である。「俗悪」「鈍物」との対峙という図式は「生活」を媒介して行われる。しかし、李徴は不可能の刻印を背中に負うて登場するのであるから、「文名は容易に揚がらず、生活は日を追うて苦しくなる」のは当然の成り行きである。「生活」が「世界」の一部であるかぎり、李徴にとつて適応不可能であることは言を俟たない。つまり彼は「白昼」の世界には坐す場所のない人物である。李徴の容貌は「峭刻」となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第したころの豊類の美少年の俤は、どこに求めようもない。「豊類」と「峭刻」と。この落差の中に、李徴の「世界」への信頼（願望）と不信との振幅の大きさがあらわれている。私は先に李徴の若年性と「しあわせ」の関係について触れたが、それはまた次のようにも言い換えられる。「豊類の美少年」とは「世界」の完全さへの願望であり、「峭刻な容貌」は揺らぐ自己の存在の基盤を知ったものの絶望と悲哀の形象である。李徴は絶望と悲哀でもって「世界」と対峙する。「鈍物」たちは「生活」とともに肉薄してくる。李徴の敗北は既定の事実でしかない。

ところで、問題は袁修という人物である。「監察御史、陳郡の袁修という者、勅命を奉じて嶺南に使し、途に商於の地に宿った」。

次の朝まだ暗いうちに出発しようとしたところ、駅吏が言うことに、これから先の道に人喰い虎が出るゆえ、旅人は

白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたがよろしいでしょうと。袁修は、しかし、供廻りの多勢なのを待み、馱吏の言葉を斥けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。

李徴（虎）は、袁修に向かって言う。「今、はからずも故人に遇うことを得て、愧赧の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、わが醜惡な今の外形を厭わず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交してくれないだろうか」と。その「袁修は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかつた李徴にとっては、最も親しい友であつた」。その理由として、作者は「温和な袁修の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたため」と書いている。しかし、秀才であり、温和であるからといって、この役人が「俗惡な大官」や「鈍物として齒牙にもかけなかつたその連中」とは異なるとは限らない。作者はその証拠となるものを一切挙げていない。根拠もなく袁修を過大評価するのは程々にしたほうがよいだろう（大官は「俗惡な大官」なのだからこれはよい）。袁修は「温和」であるが、「温和」であることは、俗物でないこととは何の関係もない。袁修が俗物でない証拠はどこにもない。とすれば、李徴が袁修に認める「友」の条件は、衝突しなかつた「温和な性格」以外のものではないであろう。ではなぜ袁修が、「白昼」の世界の住人である袁修が、李徴の住む暗闇の世界へ通りかかることができ、叢中の李徴と話が交わせたのであろうか。それは、

「供廻りの多勢なのを待」んだことによってではないはずである。

ついでに言っておくが、袁修が俗物であるかないかは些細な問題ではない。李徴（虎）と会話することだけでも蔑ろにできないことだが（李徴の詩を批評したり、詩の伝録を依頼されたりすることはもっと重要だ）、会話する李徴自身をどう判断するかがかかっている重要事なのである。

ここには恐らく、作者の誤解と李徴の矛盾がある。作者は李徴の語る相手が必要とするあまり、「李徴と同年に進士の第に登」つた袁修を、性急に李徴の理解者として設定した（それが正しかつたかどうかは、李徴の詩への鑑賞眼と批評眼に唯一かかっている）。「白昼」の世界の住人であり、役人の地位にいるものが、「俗惡な大官」とは異質であるという根拠も証拠もなく、「穏和な性格」によりかかつて、李徴の暗闇の叢中の世界に視界が及ぶ者として看做してしまったのである。「性格」と「性情」の不衝突。しかし、むろんこの心情的な結びつきが、二人の世界の隔絶を架橋するものでないことは自明である。

李徴は袁修を相手に自己を語り、詩の伝録や妻子のことを依頼する。妻子のことを依頼するのはよい。だが、詩の伝録についてはどうか。

長短およそ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁修は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作

者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないかと。

袁修は「素質」と「作品」を分けて考えており、しかもこの「素質」が開花していないというのではなく、「このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか」と感じる。はたして、この袁修の鑑賞眼と批評眼は確かなものであろうか。一般にはこの「欠けるところ」というのは李徴の性格や妻子のことを顧みなかったことなどが考えられているようである。もしも袁修がこのようなことを考えていたとしたら、それは文学と倫理（道徳）を直結させる通俗的な解釈に陥っているという他はない。それなら、袁修の鑑賞眼や批評眼を言う前に文学の基本的な素養を疑われることになる（あるいはまた、仮に「天宝」年間において、文学イコール倫理（道徳）という通念があったとして、それなら「どこか非常に微妙な点において欠けるところがある」どころではないだろう）。だがしかし、もしそうだとすると、李徴が「妻子のためについに節を屈した」ことは先に見たとおりであり、虎になってからも妻子を気にかけている男が愛情に欠けるとは考えられぬことである。さらに、「世と離れ、人と遠ざか」ったとはいっても、李徴はそのことを片時も念頭から去らせたことはない。これを行為の貧困と心（内面）の豊かさと言ってもよいが、むしろ、文学にとっては心（内面）の方が重

要である。これらの点からみて、李徴の「欠けるところ」はこのようなところにあるのではない（袁修は李徴のことばに引きずられてこう言ったにすぎない）。それは別の所にあるというのが、私の解釈である。

それでは、いったいどこにそれはあるのか。李徴の即席の詩を見てみよう。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃
今日爪牙誰敢敵 当時声跡共相高
我為異物蓬茅下 君已乘軺氣勢豪
此夕溪山對名月 不成長嘯但成嗥

この頸聯の文句に注意しよう。李徴は袁修を羨んでいるのである。「詩家としての名を死後百年に遺そうとした」李徴が、今、袁修の「俗悪な大官」の系列に連なる成功を羨んでいるのである。これは、「どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがある」どころではなく、大いなる矛盾、「自尊心」も「珠」としての矜持も吹き飛んでしまう大きな矛盾ではないか。だが、それは袁修の思慮の及ばぬところでの話である。袁修にそれを言う資格もないし、見抜けるはずもない（ただし、李徴に関しては、自己の不幸な境遇に感嘆するとき、即席の詩においてこうした矛盾をさらすのは致し方のないことかも知れない）。このような袁修に、李徴は果たして自己を語ることができるであろうか。もつとも、李徴はこのとき、「愧赧の念をも忘れるほどに懐かしい」とする心情性の中に浸っているのだ

り、袁修も同様に、虎が人語を操るという「この超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪しもうとはしなかった」のであるから、二人の間に全く乖離はない。これは袁修が完全に李徴に同化してしまっていることを示している。この親和性は、李徴の告白に完全な独白としての意味しか与えない。ただ、俗悪な世間との対峙という図式が、李徴の「世界」との関係の底辺で支えており、その実質に影響はない。

李徴は虎になった自分を見て、初め、「これは夢に違いない」と考えるが、ついに夢でないと悟った時のことを次のように説明する。

自分は茫然とした。そうして、懼れた。まったく、どんなことでも起りうるのだと思うて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになったのだろう。分らぬ。まったく、何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きていくのが、我々生きもののさだめだ。

ここまで読み解いてくれば、この説明は実によく分かる説明だと思う。少しも曖昧ではない。「世界」が、そして運命というものの正体が究極的に「分らぬ」ものである限り、人間は、人間というものの地位は常に危ういものであり、不安という曖昧なものを通り越して、いつでも人間以外のものに顛落しうる。「世界」への信頼は夢にすぎない。それは何と恐ろしいことであろう。ここで、人間が人間であることの根拠のないことが

暴露される。だから李徴は「いったい、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを憶えていたが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思ひ込んでいるのではないか？」というふうに、偶然的な仮象に欺かれる人間の悟性への不信を述懐しないわけにいかない。人間は、人間ではない（いったい、夢と現実といずれが夢でいずれが現実なのか。誰がそれを確信できるのか）。

だが、これは人間がそのまま虎であるということを意味しない。それにはちゃんとした別の理由がなければならぬ。

李徴が人間の運命——「世界」の中の人間の位置——を洞察してみせたあと、「考えようによれば」とか「思い当たること」などを挙げてする説明は紛らわしい。実はここで肝心なのは、「自分の中の人間」が姿を消すまでの李徴の失意と絶望と憤懣の全質量なのである（これはすなわち「世界」は「分らぬ」ものだということからくる失意と絶望と憤懣のことだ）。これが、李徴が他の何ものでもなく虎であることを決定する。念のために言っておくが、李徴は虎になったから失意や絶望や憤懣を抱くのではなく、失意や絶望や憤懣によって虎になるのであり、それが虎であることを証拠立てるのである。ただ、叙述の都合上、この順序は逆になる。

李徴は、詩人として名を成すつもりでいた。だが、業いまだ成らざるうちに虎になるという運命に見舞われた。しかし、「とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死にきれない」。李徴は「人間であったとき、努めて人と

李徴はなぜ虎になったか

の交を避けた」が、それは「ほとんど羞恥心に近いもの」のためであった。「己の珠に非ざることを惧れるがゆえに、敢て刻苦して磨こうともせず、また、己の珠なるべきを半は信ずるがゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかった」と言う。こうして孤独と孤立はほとんど李徴の属性となる。李徴は「しだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚」は募るばかり。それも、「詩家としての名を死後百年に遺」すという名譽ある目的意識によって辛うじて代償は支払われていた。だが、虎と成り果てた今、「才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己のすべてだった」という自責の念に打ち勝たれる。「己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ」と思うと、「胸を灼かれるような悔いを感じる」。「どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪えなくなる」。李徴は、人々の誤解と無理解を嘆いてばかりはいられない。俗悪な人々の構成する世間は遙か彼方に遠ざかり、生の充足の理念を及ばずながら与えていたこの世の當為の秩序は碎け散り、暗黒の「世界」と一人対峙する李徴の中にあるものは、おのれの「チツボケな存在」に数十倍数百倍する失意と絶望と憤懣のみである。恐ろしい人間の運命を垣間見た底知れぬ感情の抜け殻と、そこからひょっこり顔を覗かせる憤りと悲しみのほかには、もはやこの暗闇の叢中で探し出せるものは何もない。

だが、李徴という人物を矮小化して解釈してはならない。李徴の自己卑下や自嘲癖に乗ってはならない。とりわけその「自

尊心」に関して、それを強く戒めてかかるべきである。李徴の「自尊心」は「詩家としての名を死後百年に遺そう」とする自尊心であり、「産を破り心を狂わせ」「己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ」てなお余りあるものであった。この第一級の「自尊心」のために受けた数々の傷と、そこから広がる失意と絶望と憤懣の全重量によって、李徴は、まさしく「虎」になったのである。

この虎は、確かに「世界」を、そして彼が虎になった運命の原因を知ることとはできなかった。だが、このことは彼が詩人になれなかったこととは無関係である。「詩人になりそこなつて虎になった」とは因果関係のことではない。そればかりでなく、彼が詩人でないという証拠はどこにもない。むしろ彼は、袁修の評言を借りれば、生前第一流の詩は書けなかったが、詩人としての素質は第一級であったものではあるまいか。次なる場面を見てみよう。李徴は、袁修との別れに際して言う。

今別れてから、前方百歩のところにある、あの丘に上ったら、此方を振りかえつて見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。わが醜悪な姿を示して、以て、再び此処を過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こさせないためである……。

そこで袁修は叢中に向かって懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上る。「叢の中からは、また、堪ええざるがごとき悲泣の声が洩れた」。袁修は叢を幾度も振り返りながら出発する。作者は、

李徴の最後の姿を次のようにしるしている。

一行が丘の上についた時、彼らは、言われた通りに振返って、先程の林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、既に白く光りを失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、元の叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

この光景、袁孝とともに我々が目にする李徴の（虎の）最後の姿、「時に、残月光冷ややかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に曉の近きを告げていた」といった、おそらく李徴の（虎の）胸中にも思い描かれていたであろう情景に加えて、袁孝の一行を丘の上に配置せしめ、こちら林間の草地の茂みから二声三声の咆哮と時を同じくして虎の躍り上がる図は、第一級の詩人にあらずして決して描く能わざることと思われる。李徴に（そして李徴の詩に）欠けていたものは、袁孝がほめかすようなところではなく——つまり李徴の性格や実生活上のあれこれにあるのではなく——実にこの遠近法の欠如という点にあるのであった。この遠近法の欠如が、致命的に李徴の才能の開花をさまたげたのである。李徴は、同時代人に理解されないという不幸を背負っていたがために、それに緊縛され身動きならず、ついにこのような視野狭窄に陥ってしまったのである。誠に惜しむべきことであり遺憾なことというべきである。

（えなみ としひろ・一九七五年度卒）